

受領No. 1642

女性作家による文学と科学の対話：有吉佐和子『複合汚染』を中心に

代表研究者 江口 真規（筑波大学 助教）

Dialogue between Literature and Science by Female Writers: Focusing on Sawako Ariyoshi's *Fukugō-Osen* (Compound Pollution)

Representative Maki Eguchi (Assistant Professor, University of Tsukuba)



研究概要

有吉佐和子の『複合汚染』は、1974 年から 1975 年に『朝日新聞』朝刊に連載された新聞小説であり、農薬や工場排水、合成洗剤などの化学物質の人体や環境への影響が取り上げられている。本作は単行本化されるとベストセラーとなったが、政府や科学者、技術者からの反論が続き話題となった。

本研究では、高度経済成長期に発生した公害への危機感を背景に発表された本作を、エコクリティシズム（環境批評）、および新聞小説というメディア的観点から読み解くことを目的とする。科学技術の進歩が人体や自然環境に深刻な影響を与えることが次第に明らかになっていった当時、『複合汚染』は、科学の知識を伝えるにはどのようなメディア・ジャンル・構成・文体が効果的であるのかを実験的に試みた小説である。さらに、本作の受容と評価に作者の女性性に関係しているとすれば、科学的言説を女性の立場から語ることにどのような意義が見出せるだろうか。本研究では、有吉の作品群における『複合汚染』の位置付けを明らかにし、小説連載時の新聞記事から読み取れる社会的・科学的言説と本作に対する反応を調査する。そのうえで、本作を課題とする読書会を開催することにより、文学と科学の対話の可能性を検証することを目指す。